

から借用した一万八〇〇〇両はまたたく間に費消し、八月にはさらに五万両の拝借を願わなければならなかつた。そこで、余裕のなかつた新政府であつたが、小倉藩には一万両を下げ渡した。十月には、東北派遣軍の防寒具代一五〇〇両も調達が出来ず、やむなく軍務官に借用を願い出て、軍務官は一〇〇〇両を貸与するという有り様であつた。だから、小倉藩としては八月の五万両の拝借は是非とも必要であり、執拗に新政府と交渉をした。その結果、十二月になつてようやく二万両の拝借に成功した。

藩内でも当然財政緊急措置を講じた。小笠原一門と中老（家老職を出す家柄）は禄高五百石に統一、馬廻り役は二百石で頭打ち、書院番・近習頭・組付はすべて一五石四人扶持、組抜・足輕は七石二人扶持、中間は四石一人扶持に統一した。そして、節減した禄高米を軍資金に回した。

## 二 戊辰戦争と小倉藩兵

### (一) 戊辰戦争

#### 不安定な新政府

慶應三年（一八六七）十月十四日の大政奉還はけつして幕府の滅亡を意味しなかつた。

同日、朝廷から薩摩・長州両藩に「討幕の密勅」が出されていたが、政権の帰趨は分からなかつた。朝廷は、この大政奉還の申し出を契機に、一〇万石以上の大名に対して十一月中に上京するよう命じた。またそれ以下の諸大名に対しても、京都に参集するようとの勅命を出した。この時、京都の

形勢をみて、諸藩主らは上京しなかつた。薩摩・越前・尾張・安芸・広島などは参集したが、これでは諸藩主による会議と国是の決定は出来なかつた。

以上の四藩のうち、広島浅野藩は既に薩長同盟に幕長戦争後の九月に加盟した形で、薩長芸同盟を結んでいた。また譜代大名の筆頭である彦根藩は、進んで新政府に協力の態度を表明していた。この時点（鳥羽・伏見の戦い前）で新政府側の勢力となつていたのは、この彦根藩をはじめとする討幕派第一グループ（第一は、当然薩摩・長州・土佐・肥前である）にあたるとされる阿波・平戸・大洲・大村・佐土原の諸藩であつた。

十二月二十八日に將軍徳川慶喜の辞官・納地問題が、山内容堂らの主張する線で、すなわち慶喜の希望どおりに解決した日であつた。つまり慶喜の辞官・納地受諾回答は、徳川慶勝・松平春嶽により、三十日に朝廷にもたらされた。あとは慶喜が参内して辞官・納地のことを奏上すればよい手筈になつていて。

こうなると今度は新政府側が、いつどのように徳川慶喜を入京させるかと悩むことになつた。この件に関して、新政府側の態度はなかなか決定出来なかつた。これは徳川慶喜を支持する勢力が、王政復古の大号令が出された後でもまだ相当な力を有していたこと、逆に新政府側はためらいがあつたのである。

十二月九日のクーデターの意味がなく、やり方が強引だったのでその反発も大きく、心配であつた。そうしたなかで、むしろ政治情勢はこのように討幕派にとつて不利に展開していく。

### 鳥羽・伏見の戦い

こういった状況を大きく変えたのが、慶應四年（一八六八、九月八日明治と改元）正月三日に始まつた鳥羽・伏見の合戦である。前年の十二月二十五日討幕派の策謀にのつた庄内藩兵による薩摩藩邸焼き打ち事件が起つた。この原因が、新政府側の江戸攬乱戦術と分かると、大坂

にいた慶喜をはじめとする幕閣や旧幕府軍は激昂して、時局の推移を見誤った。明けて元旦に、「討薩の表」を差し出そうとした。致命的な大失策である。旧幕府側勢力の命運はこの瞬間に決まった。

正月一日、旧幕府軍一万五〇〇〇の大軍は京都に向けて進撃を開始した。会津藩を先鋒とする旧幕府軍の本隊は伏見街道を目指した。別働隊は桑名藩を中心として鳥羽街道を進軍した。翌三日京都になだれ込む作戦であった。旧幕府側の反撃である。これが鳥羽・伏見の戦いとなる。新政府側は一時動搖したが、戦況は旧幕府軍側は圧倒的な軍事的優勢にもかかわらず、討幕派が勝利した。その結果、慶喜は「朝敵」となったのである。六日、慶喜は大坂城の幕閣に江戸に帰る意思を伝え、幕閣（会津・桑名藩主も）はひそかに大坂城を脱出して海上江戸に向かった。戦端が開かれて、その間三日であった。

この戦いは、紀伊藩・肥後藩など藩論決定が微妙であった藩を離反させ、新政府側につかせることになった。さらに、慶喜らの退去を知った幕吏・諸藩士は、「三百年の天下を三日にして失えるかと慷慨<sup>こうがい</sup>し、或は失望落胆して相顧みて茫然たる有り様であつた」（『維新史』第五卷一五五ページ）。

これ以来、近畿以西の諸藩の態度を一変させた。ほとんどの抵抗もなく、こぞつて新政府側についたのである。二月九日、総裁有栖川宮熾仁親王を東征大総督に任じた。そして二月十五日、大総督は錦旗を翻えして東征の途にのぼった。参謀は西郷隆盛・広沢真臣<sup>さねおみ</sup>らと、二人の公家であった。東海・東山・北陸の官軍総数約五万、薩・長・土三藩の兵が主力であった。

## 江戸の制圧

江戸城の無血開城（四月十一日）は、旧幕府軍の戦力を温存する結果をまねいた。江戸市中では、上野寛永寺に結集する彰義隊が市中警邏を命じられたことをよいことに隊伍を組んで横

行し、あちこちで官軍兵士と衝突したが、東征大総督府參謀の西郷隆盛はどうすることも出来なかつた。そこで、西郷にかわつて長州藩出身の大村益次郎(ますじろう)が東征軍の最高指揮權をにぎつて、綿密な作戦をたて五月十五日に約二〇〇〇の兵をもつて約一〇〇〇人の彰義隊を一〇時間の激戦の末掃討した。このとき、本郷台に据えた肥前藩のアームストロング砲が絶大な威力を發揮した。上野彰義隊の掃討は、官軍の関東地方全域における威信を回復し、七月十七日には江戸を東京とすることが決定し、政治の中心を京都から東京へ移す準備が始まつた。徳川慶喜の領地を駿河とすることも発表された。こうして、東征軍は残る強敵会津・庄内両藩の征討に全力を注ぐ状況が生まれてきた。

**会津・庄内藩**　鳥羽・伏見の戦いが終わつて、新政府はいよいよ「朝敵」狩りを本格的に開始した。一月征討令 十七日、京都に逗留中の仙台藩の家老に会津藩の追討令が下つた。同様に秋田藩には追討応援の内意が伝えられた。そして、十七日には会津藩主松平容保の死罪の方針が決定していた。

二月中の東北諸藩の動向は、先を争つて新政府側に帰順を表明していくた近畿以西の諸藩とは対照的に、どの藩もお互いに使者を送つて藩論の動静をさぐりあつていた。

徳川慶喜は新政府に対し絶対恭順の方針をとつたが、容保は江戸から帰るとき、オランダ商人から武器弾薬を購入し、徳川軍から軍資金や武器を借りている。会津藩は三月に軍制改革を行い、藩士を年齢によつて四隊（白虎隊など）に編成した。さらに、二〇～四〇歳の農民二七〇〇人による農兵を組織した。藩を挙げて抗戦体制を固めた会津藩は四月十日、庄内藩と同盟を結んだ。

この一月十日公表した「朝敵」のなかに庄内藩の名は無かつた。しかし、徳川家の側近であることから、

なんらかの処分を受けるのは時間の問題であった。

新政府は鎮撫使を派遣し、その一行は三月二十三日仙台入りした。総督は九条道孝（五撰家、左大臣）、副総督には沢為量（公卿）、参謀として大山綱良（薩摩）・世良修藏（長州）が任命されていた。

**奥羽越列藩** 会津・庄内両藩は抗戦の決意を固め、四月十日に軍事同盟を結んだ。四月二十四日には薩長同盟の成立の小部隊と庄内軍との戦闘が始まる。四月下旬、関東の情勢が東征軍に不利であることが伝

えられ、反新政府の気運が強まると、閏四月四日、仙台・米沢両藩から東北諸藩に会津藩問題について白石（現宮城県白石市）で会合を行いたい旨の回状が出された。この会合の結果、十一日、仙台・米沢両藩から鎮撫總督に会津藩に対する寛大な処分を要請する歎願書が出されたが、総督はこれを拒否し、早急な会津攻撃を厳命した。このため十九日夜、仙台藩士は強硬な意見をもつ総督府参謀世良修藏を福島で襲い殺害した。

そうして東北諸藩全体の強固な統制・統一の必要に迫られた。閏四月二十二日、いわゆる「白石盟約書」が成立する。さらに五月三日、仙台・米沢両藩を中心にして東北二五藩による奥羽列藩同盟が成立した。会津・庄内二藩は形式上この中に入っていない。

前後するが、北越地方では二月から三月にかけて、会津藩が蒲原郡に領地をもつていたので出兵し、桑名藩主松平定敬（さだあき）も領地柏崎で抗戦体制をとり、古屋佐久左衛門の率いる旧幕兵、衝鋒隊も新発田に進出した。

新政府側も四月十九日、高倉永祐（たかくら えいすけ）を北陸道先鋒総督兼会津征討総督に任じ、薩摩藩士黒田清隆（くろだ せいりゅう）（了介）、長州藩士山県有朋（ひらき ゆうへい）（狂介）らを参謀とし、薩長軍をつけて越後に向かわせた。

長岡藩では家老河井繼之助の指揮の下に軍備を整えて、武装中立の立場をとっていた。河井は、三月、江

戸藩邸を引き払うときに、横浜でガットリング砲（当時の機関銃）をはじめとして、武器弾薬を買い入れていたのである。五月一日、東山道先鋒総督府の軍監岩村高俊（精一郎）と河井の交渉が小千谷<sup>おぢや</sup>で行われたが決裂した。五月四日、長岡藩は奥羽列藩同盟に加入するが、五月六日には新発田・村上など北越五藩も同盟に参加し、ここに北越六藩と東北二五藩（会津・庄内の二藩を加えれば二七藩）の同盟、奥羽越列藩同盟が成立した（第9表参照）。

表9 奥羽越列藩同盟

	藩名	県名	石高
1	仙台藩	宮城	62万5000石
2	米沢藩	山形	18万石
3	盛岡藩	岩手	20万石
4	秋田藩	秋田	20万5000石
5	弘前藩	青森	10万石
6	二本松藩	福島	10万700石
7	守山藩	福島	2万石
8	新庄藩	山形	6万8200石
9	八戸藩	岩手	2万石
10	棚倉藩	福島	6万4000石
11	相馬藩	福島	6万石
12	三春藩	福島	5万石
13	山形藩	山形	5万石
14	平藩	福島	3万石
15	松前福山藩	北海道	3万石
16	福島藩	福島	3万石
17	本荘藩	秋田	2万21石
18	泉藩	福島	2万石
19	龜田藩	秋田	2万石
20	湯長谷藩	福島	1万5000石
21	下手渡藩	福島	1万石
22	矢島藩	秋田	8000石
23	一ノ関藩	岩手	3万石
24	上ノ山藩	山形	3万石
25	天童藩	山形	2万石
26	新発田藩	新潟	10万石
27	村上藩	新潟	5万9000石
28	村松藩	新潟	3万石
29	三根山藩	新潟	1万1000石
30	長岡藩	新潟	7万4000石
31	黒川藩	新潟	1万石

**奥羽鎮撫から  
征討軍へ** はじめ官軍の東北鎮撫の方針は、もっぱら会津・庄内二藩の征討にあつたが、奥羽越列藩

同盟側は白石に公議所を置き、福島に軍事局を設けて、諸藩の力をあわせ、会津・庄内二藩を支援・抗戦体制を整えた。奥羽鎮撫使の九条道孝は五月十八日に陣営を仙台より盛岡に移して六月三日には到着した。

庄内方面を転戦中の副総督沢為量は五月二十七日には能代に至つて戦況を見守つて、同地にとどまらざるを得なかつた。やがて、七月朔日には九条總督はつつがなく久保田に到着し、随伴していたのは「薩摩・長州・筑前・佐賀・香春の五藩兵も相合して、其の勢八百人餘」(『維新史』第五卷二八六ページ)であつた。久保田藩の藩論は總督到着後も決定しなかつたが、三日に至り恭順の意思を表明して先鋒となることを誓つた。

こうして總督府は庄内征討諸軍の部署を定め、筑前・久保田二藩兵を新屋口に、「薩州・長州・佐賀・香春四藩兵を院内口に派遣する」(『維新史』第五卷八七ページ)ようく決め、久保田を七月六日に出発した。

この間、五月十九日、新政府側は「従来の鎮撫方針を一擲し、断乎武力を以て東北地方を征服するに決し」(『維新史』第五卷二六一ページ)て、新たに東征大総督有栖川宮熾仁親王に会津征伐大総督を兼ねさせた。そして六月七日には鷹尾隆聚を奥羽追討總督とし、さらに大総督府參謀にも任じた。この配下に板垣退助(土佐藩)・伊地知正治(薩摩藩)を大総督府參謀補助に任じた。大総督府の会津討伐作戦は、まず仙台・米沢藩などの諸藩を討つて、会津を孤立無援の状態に陥れて降伏させる方針であつた。

板垣は七月二十六日白河口官軍を率いて棚倉攻略、渡辺清左衛門は平潟口官軍を率いて磐城平へ進発した。こうして、七月二十九日には二本松城が官軍の手に落ちた。白河口総督府參謀をつとめていた板垣退助は、

「奥羽嚴寒ノ地、今ヨリ三四十日ヲ経ハ、必ス雪ヲ見ルニ至ラン、暖地ノ兵ヲ以テ嚴寒ノ候に向フ……ソツ（兵卒）ニ来春ヲ期セサルヘカラス」（『維新史』第五卷二七一ページ）とて、八月十九日方針転換を迫つて、直接会津討伐の方針を貫いていた。

板垣退助らは二本松に駐留していた薩摩・長州・土佐・大垣・大村・佐土原の六藩兵を率いて若松城を目指して進軍した。ほかに白河の館林・黒羽の藩兵を三斗小屋から、須賀川・白河・白坂にある尾張・紀州・佐賀・守山四藩兵を勢至堂口から進軍させた（『維新史』第五卷二七一ページ）。

### 東北戦争

北越地方で、新政府軍と長岡藩を中心とする同盟軍側の激しい戦闘が続いていた。新政府軍は五月十九日、長岡城を占領したが、兵力が不足し、補給も難点があつた。同盟軍は米沢・庄内などの増援があり、オランダの商人から武器弾薬の補給をうけて反撃に出た。六月二日、新政府軍が本営を置く今町を奪回、さらに七月二十四日、河井の指揮の下に長岡城を攻撃して奪回した。しかし、これが同盟軍の北越における最後の反撃であつた。新政府軍は、新たに会津征討越後口総督に任せられた仁和寺宮嘉彰親王よしあきが七月十五日、柏崎に到着、二十一日には五隻の軍艦が来港した。また新政府軍一〇〇〇余人が二十五日、松ヶ崎に上陸し、新政府軍の軍艦が新潟港を封鎖した。二十九日には新潟は新政府軍に占領され、同日、長岡城も新政府軍の手に落ち、同盟軍は敗走し、越後は新政府軍により制圧された。

準備を整えた新政府軍は八月二十日、二本松を出発、保成（母成ぼせう）峠を突破、二十二日、猪苗代城（亀ヶ城、福島県猪苗代町）を攻略、翌二十三日には若松城下（福島県会津若松市）に殺到した。会津藩の主力部隊は越後・下野方面におり、新政府軍の進撃があまりにも急速であつたために、若松城に引き揚げることが出来な

かつた。城下には四〇〇～五〇〇の兵力しかなく、しかも老人、少年が多かつた。若松城下はたちまち戦火につつまれ、多くの藩士の家族が集団自殺をとげた。有名な白虎隊の悲劇もこのような混乱の中で起きたのである。新政府軍は、略奪・暴行を公然と行い、老若男女を殺戮した。

急を知つて、各方面に出動していた会津軍が次々と帰城し、兵力が増強したので、一時、新政府軍の攻撃がにぶつた。しかし、若松城は新政府軍に包囲されてしまつた。特に城の東南一・五(キロメートル)の小田山に据えられた肥前藩(新政府軍)のアームストロング砲が猛威をふるつた。この間にも八月末に米沢藩が、九月十五日に仙台藩が政府軍に降伏し、会津藩は全く孤立してしまつた。ついに九月二十二日、会津藩の抵抗は終わり、白旗が大手門に立てられた。無条件降伏である。東北戦争における第二戦線であつた庄内藩兵と新政府軍との戦闘は庄内藩の優勢な情勢で展開されたが、八月末の米沢藩の降伏によつて逆転し、九月十六日から退却に転じた。二十四日南部藩が政府軍に降伏したので、二十七日、最後まで頑強に抵抗していた庄内藩が降伏した。こうして東北戦争は終わつた。

## (二) 小倉藩の奥羽出兵

**小笠原藩の出兵** さて、慶応四年(一八六八)正月十日、新政府から出兵の要求がなされると、小倉藩は

三度にわたつて藩兵を京都に派遣した。藩の船で船団を構成して、沓尾港(現行橋市)から出航した。第一回の出航は二月六日で、重臣(「御人数頭并在京中御家老代」(鎌田英三郎戊辰日記))として

平井小左衛門を中心とする平井隊の総勢一七〇人余で二月末から三月初めにかけて大坂に到着した。二陣目は二月十七日出航（九十余人の軍勢）、三陣目は島村志津摩隊として、二百十余人の編制で、総勢四百余人の藩兵を送り出した。そして、そのほとんどが大坂で宿陣を余儀なくされた。新政府から小倉藩に出された命令は、三月十九日に「関東先鋒之官軍既及戦争、賊徒敗走之趣に候得共、此先一ノ手援兵申来候はば、早々人数繰出候様可有支度」と要請してきた。そこで以下の藩兵の編成を行つた。

## 覚

一、備頭 一人 隊長四人 監察一人 軍議役一人 使番一人 医師一人 兵隊百式拾人  
其外付属役々并又者人夫共五拾人

計 百八拾九人

やがて三月二十五日正式に出動の命令が下り、翌日出発した。この隊を平井小左衛門隊という。これと同時に、「大坂表御警衛」の命令を受け、要員は一八〇人で、この任には島村志津摩があたつた。この任は閏四月に終了したので、島村は藩兵五〇人を残して帰藩した。そして、残された藩兵五〇人はやがて大坂市中警邏を命じられた。

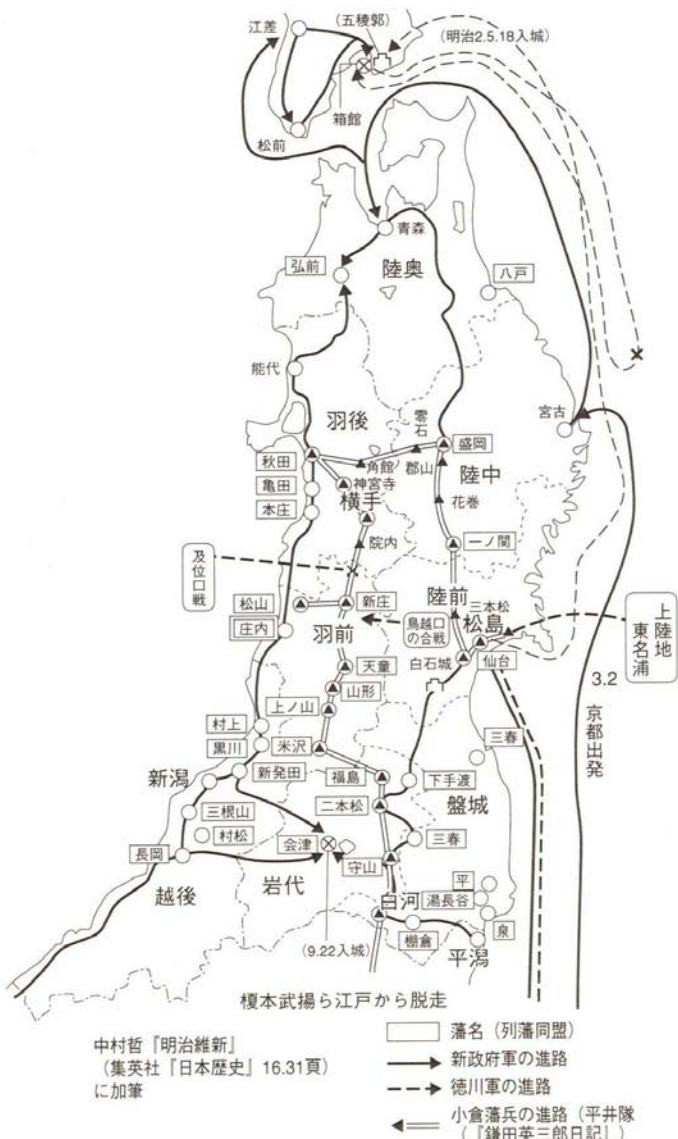
**羽州院内戦争と 慶応四年（一八六八）三月十九日、関東一の手援兵として京都で編成された平井小左衛門隊**

**小笠原藩兵** 門隊は、二十六日京都を出発、四月十八日には江戸に到着。そこで江戸守衛軍下に配属され、江戸城西丸、坂下門、金座などの警衛に当たつていた。やがて奥羽方面の転戦を命じられた。閏四月二十七日に佐賀藩兵とともに英國船で横浜出帆、五月十日仙台に到着した。そして奥羽鎮撫使の九条道孝に

従つて、庄内藩追討のために出發（五月十八日）、南部（盛岡）を経て六月十八日久保田（秋田）に到着して副総督沢為量麾下の薩長の部隊と合流して、院内口より進攻して、庄内・米沢・仙台の各藩兵と交戦。主な交戦地は、雄物川上流一帯であつた。庄内藩（鶴岡）が九月末に降伏したので、山形、福島を経て十一月十九日東京（七月改称）に戻つた。そして、陸路東海道を下つて十二月十三日京都に帰還して、香春に帰藩したのは明治二年正月八日のことであつた。以上が、簡単な平井隊の従軍記録である。さらに詳しく、この隊と東北戦争の関係を見ていきたい。

出發に際して、三月二十五日に一騒動が起つ（以下、引用箇所で断りの無い史料は、小倉藩維新史料『鎌田英三郎戊辰日記』による）。それは歩兵たちから不満が出た。「歩兵壱人前金拾両ツ、之拝借」の申し出があつた、もしかなわなければ「東下出来不申段云々申募」つてきたので、隊長が島村志津摩や平井小左衛門に相談したが却下された。理由は次のように述べられている。「私共御国表出立之節被仰聞候は、此度上京之上は壱人前武拾七匁被下置候趣承り候付、左様候は諸方如何共相成可申付上京仕候、然ル処當所ニ而は壱人前已拾匁之被下ニ而諸方出来不申」と滞在費不足（衣類などにも及ぶ）を述べた上で、さらに「東下」のことを仰せ付けられても、その件は出来かねると迫つたからである。そこで、結局は彼らを任務からはずし、帰郷を命じた。しかし、ほかの隊にも同様に要求する歩兵がいたので同様な扱いをするようにしたが、なおその歩兵たちは「封金にても拝借」を願い出て、これは認められた。このように、藩の財政的な裏づけがないことは周知の事実——強調されてきたが——むしろ、歩兵たちの境遇の方が深刻だったと見ることも大切であろう。以下、この平井隊の行動を追つてみる（第10表と第4図参照）。

第2章 明治維新と小倉藩



第4図 奥羽越列藩同盟と小倉藩兵平井隊

第10表 東北戦争年表

年号	年数	西暦	閏月	月	日	維新期のおもな出来事	鎌田英三郎戊辰日記
慶応	3	1867		10	14	徳川慶喜大政奉還を上表。薩摩・長藩主父子に討幕密勅下る。	
	4	1868		1	3	鳥羽・伏見戦争おこる。	
				10		徳川慶喜、松平容保、松平定敬、板倉勝静らの官位を奪い、各京都藩邸を没収す。	
			2	6		香春から京都に出発。 兵庫港、出帆。	
			22			松平容保帰藩。	小笠原藩鉄隊100人、関東官軍の二の手援兵を命じらる。
			3	19		仙台・米沢両藩代表が会津若松に会し、会津藩救解について相談する。	金座警衛を命じられる。
			25				小倉藩兵300人上京、大坂警衛を命じられる。
			4	26			大蛇賀宮より、庄内追討を命じられる。
		閏	4	1			北陸道下参謀に肥前藩士前山清一郎に仰せ付けられる。
			9				北陸道下参謀に肥前藩士前山清一郎に仰せ付けられる。
			19			仙台・米沢両藩主、会津征討攻口の解兵を九条経費に託す。	北陸道下参謀に肥前藩士前山清一郎に仰せ付けられる。
						黒田清隆、山県有朋、岩村精一郎、高田に会し、北陸鎮撫について会談。	
			5	1		政府軍、平岡を奪回。	
			6			北越6藩、同盟に加入、奥羽越列藩同盟となる。	(前山の衝談に) 九条殿に警衛がない、また下參謀は殺害にあった。沢湖總督は薩長の新庄へ逃げ延びて、長藩主は、鷹狩行方不明。
			14				義賢院にて、九条殿下、醜醜少将の間兵、仙台藩家老と軍議(会談)、その結果佐竹へ赴くことに決定する(救出の成功)。
			18			九条経費、仙台を發し盛岡に向かう。	両郷仙台出発。
			19			政府軍、長岡を占領。	両郷とも七北から三木本にいたり、古川着。
	6	13		16		政府軍、平潟に上陸。輪王寺宮、奥羽越列藩同盟の盟主となる。	幸石出発。巣鴨山の山越え、秋田宿宿内へ泊。
			17				角類出発、平道寺駒、町和野泊。
			7	4		秋田藩士ら仙台藩使者を殺害し、同盟脱退。	佐竹藩より先陣を願い出る。
			5				仙台藩から使者によく三卿に帰京を促す、使者を斬殺する。庄内追討口決定、さらに陣削りを決める。
			11				今崎より及位のぞき(一真室川町)口戦争。
			14				鳥頭戦争にて、苦戦、長・倉藩しがりにて佐竹側に撤兵。上院内に宿障。
			29			二本松城陥落、長岡城陥落。	
		8	1				各藩談判の上、横手まで引き揚げ。長崎船逃隊横手に着陸。
			8			盛岡藩、秋田進攻のため出兵。	陸軍進撃の手筈にて岩崎川まで進軍の所、誠軍と戦闘、苦戦し後退する。
			28			米沢藩、降伏の意を示す。	誠、急時分、本間道より襲来、長州兵迎戦、小倉藩兵の所には来なかつた。刻早、誠軍引き揚げ。
		9	14				角館会議所(参謀局)にて各隊長連絡、總督府の指図なく無理な行動をなす旨(切腹の覚悟)に血刊をする、小倉藩士は難儀の如きがした。
			15			仙台藩降伏。	仙台出立、舟間へ度々登場。 水戸へ脱走、味方の軍車、敗軍ながら長州藩兵に刀銃戦。 小倉藩兵、忠信、筑、砂原、秋田、新庄の各藩兵申し合せ、一同壇堵進軍、船上・淀川へ胸牆を構えているところを一夜攻撃、苦戦。
			16			庄内藩兵を中心とする同盟軍、秋田道より撤退する。	昨日より戦争の所、誠軍敗走。 翌日より追い打ちは解く、刈谷野へ向けて進軍。同所に一日。
慶応	4	1868	9	22		会津落城。松平容保、城を出る。	越後守(九条経費より)から平井左衛門に対して「芳賀戦力」とのねぎらいと賞賛金30両・ピストルを下された。
			24			盛岡藩、降伏する。	院内、宿障。 急報局から、諸藩兵に對し「連戦因兵」のねぎらいあり。小山勇、通山にて戦死。 集山平右衛門(植奉行)→R23)秋田城下にて死去。
			27			庄内藩、降伏する。	駒形出立、小倉藩州・長州・新庄・角館藩など一同、庄内方面へ脱走。 松山城へ到着。 酒井記伊開城。 松山城受け取りに軍監木藤弥太郎(蓬庵)・(参謀局)使役鎌田英三郎(小倉)・向土野他吉郎(長州)。
			28				松山城出発、酒田城へ進軍。 足利時政の赤穂・飯坂などの受け取りは侍役・軍監、武治の畠受け取りは八保田佐八郎(蓬庵)・上野他八郎(長州)・鎌田英三郎(小倉)にておこない。 ミニケール銃461挺・元込め銃4挺・ケーラー3挺・和銃486挺など。
		10	3				酒井忠朝降伏について、兵隊一先引き揚げ様、参謀局から賛成有り。 酒井出発。 参謀局からの慰め出し。 一、奥羽越徒悉く降伏謝罪、近々久保田由御出馬、最上・若狭通行一先東京へ御凱旋について、大蛇賀宮に向うの方へなっている。右に付き、速々解兵、各藩兵隊軍別戦闘に引き揚げの命令。

(佐々木克『戊辰戦争』中公新書、小倉藩維新史料 鎌田英三郎戊辰日記などから作成)

この小倉藩の東北戦争出兵での、重要な点は以下のとおりであろう。

①仙台に事実上は軟禁状態にあった九条道孝総督らの仙台脱出

五月十四日、仙台藩の養賢堂にて、鎮撫総督九条道孝と参謀の醍醐忠敬の前で「軍議」が開かれた。

下参謀 前山清一郎

仙台 御家老式人

肥前人数頭 銚島孫一郎

同番頭

小倉人数頭 平井小左衛門

以上の者たちによつて会談がもたれた。やりとりは以下のとおりであった。

この地に九条殿下がおいでになつて、百日余りなり、また「豊・肥之両勢出兵」しているのに、御鎮撫の躰がないのは如何なものか、と仙台藩の家老たちに下参謀の前山が問いただした。それに関して仙台藩の家老らは、奥羽の諸藩は朝命の遵守はやぶさかではないが、薩摩・長州両藩の「暴行」に対して居合が悪いから、いつたん出兵した兵を引き揚げた。「先、御両卿様被遊 御上京候方宜敷」しいとの返答をした。

そこで、前山は両卿には鎮撫の実効もなく、そのうえ薩長両軍の暴行もあつたので、このうえは上京して奥羽の実情を報告し、また謝罪をすることにする。しかし、沢副総督と薩長両軍をそのままにして置けない。かといって、仙台の方に呼び寄せるることは出来よう筈ないので、彼らを引き連れ上京したいと考えると伝え、いわば仙台領から秋田領への脱出を秘めながら、軟禁状態の両卿の南部行きを認めさせた。こうして、

五月十八日に仙台を出発した。既に沢為量副総督と政府軍一行は五月一日に秋田に転陣していた。そして、九条らは、七月一日に同地において、秋田藩内にとどめていた薩長の兵隊と沢副総督と合流を果たすことになるのである。

翌十五日、列藩會議が仙台で催され、この問題が取り上げられた。諸藩は九条らの上京は認めても、奥羽諸藩が護衛して仙台から海路京都へ送るべきであり、秋田で、薩摩・長州・筑前の兵および肥前・小倉の兵が合流するのは危険である。むしろ、沢副総督を連れ戻し仙台にとどめるべきだと主張した。しかし、内諾を与えていた仙台藩側が九条や前山らを信用すべきだと主張して、転陣が決定したのであつた。

従軍した鎌田ら、小倉藩士のみならず九条らには列藩同盟の成立などがどの程度情報として把握されていたか分からぬ。

五月三十日の記事では

一、郡山之駅敷(ママ)泊

一、仙台藩境上江警衛之兵隊繰出、其上野心之色益在之候（中略）乍去必定会・庄同腹一相違無之よし  
一、越後長岡城主牧野備前守様、会・庄両藩江無拠同腹候處、官軍攻寄候得共会・庄両藩々援兵無之と、事態の大体の把握が出来ていた模様である。出発の翌十九日は長岡落城であった。同盟の中でも、小藩ながら、最も強力な抵抗藩が脱落していったのである。

「これなどを見ると、奥羽に事實上取り残されたこの部隊の情報入手が、いかに遅々としたものであつたかが知れる。（中略）長岡が新政府軍に占領されたのは、この日から十一日余り前のことであり、それは九条

総督一行を警衛して、倉・肥部隊が仙台城下を出発した翌日に当たつては、「（羽川満編著『往来日記』—小倉藩士小林槌太郎の戊辰戦争従軍日記』」（二五三ページ）状態だったのである。

## ②秋田領内入り

六月十三日零石（しそくし）から「秋田領 生保内江一泊」、さらに肥前・小倉藩兵らは十八日に秋田藩久保田城下に入つた。一方、総督は二十四日南部表出発、醍醐参謀は二十二日進発し、角館で落ち合つて秋田藩領に二十九日到着予定の報が入る（計画では海路で秋田入り、結局は陸路となる）。

七月一日、九条・醍醐二卿秋田城下に到着、明徳館に宿陣した。同日沢副総督も、同館に宿陣した。ここに、奥羽鎮撫府の三卿が揃い、さらに薩摩・長州・筑前の三藩兵が在陣することになり、合計五藩兵が揃つた。二日には官軍の軍艦が「磐城江六艘、平潟江九艘着」との知らせが入り、さらに「仙台は大分騒々敷よし」との有り様を南部藩から伝えられた。三日には庄内討ち入りの先鋒を五藩より申し出たが、佐竹（秋田）藩は藩論を統一出来ずについた。そして、長州藩の隊長桂太郎（のちに、陸軍大将・陸相・首相）が庄内藩兵が鶴岡からさらに酒田へ進軍し、先鋒は本庄あたりまで迫つてゐるとの情報を五藩にもたらした。

こういった状況の中で仙台から使者が参り、「九条殿并醍醐殿・沢殿其他江御帶陣ニ而御帰京」も相成不申、……早々御三卿御帰京相成候様取計可申段申越」した。しかし、佐竹秋田藩士がこれら仙台藩の使者を斬首したことによつて、秋田藩は列藩同盟を離脱して、官軍側に立ち、翌七日の庄内追討進軍に加わることになつた。

## ③庄内追討軍の苦戦

七月十日 攻略先を次のように決定した。

一、及位峠 本道 倉・肥両藩

一、銀山口 間道 長・肥両藩

一、庄内口 間道 薩・肥両藩

(十一日)

このため、「院内出立、今晩<sup>(十一日)</sup> 及位峠戦争、肥藩大砲一門、倉藩小銃二而」といった陣容で攻撃したが激戦となり、終日の戦いも勝利に結びつかず、院内に引き揚げることになった。特に、十四日には庄内藩兵の逆襲による攻撃によって、これ以降、官軍は連戦連敗で後退を余儀なくされた。そして、雄物川流域では戦闘は膠着<sup>こうちゃく</sup>状態に陥った。秋田領内でよく戦っていた庄内藩兵が九月十九日突然退却を始めた（佐々木克『戊辰戦争』一四五ページ）。これは八月末に米沢藩が降伏し、さらに九月十五日仙台藩が降伏して官軍側の一員になつて攻め寄せる気配を見せたためであった。この時点で戦っていたのは、会津と庄内藩だけであった（同『戊辰戦争』一四六ページ）。もう一つの藩の会津藩は、官軍から包囲された中で八月二十三日から籠城態勢に入つて頑張り抜いていた（同『戊辰戦争』一五八ページ）。有名な白虎隊の悲劇はこの前日のことである。そうして、九月二十二日会津は開城して降伏した。

庄内支藩の松山藩は、「朝七時、庭月出発、小倉・薩州・長州・新庄・角館藩等一同、庄内江進軍、夜六時比松山城江着、酒井紀伊開城」し、同藩の家老加藤助之丞の案内で官軍は城内に入り込んだ。松山城の請け取りと改めには、「軍艦薩州藩木藤弥太郎、使役鎌田英三郎、同長州藩上野他吉郎」が命じられた。翌日にはさらに支城の酒田城の開城が行われ、同じく三人が請け取りに赴いている。

宗藩の庄内藩の攻略は越後口の官軍黒田清隆（了介）の率いる官軍に攻められ、九月二十七日に降伏、十月一日鶴ヶ岡城を開城した。なお、会津藩攻略には、小倉藩兵は参加していない。

### 高木悦蔵隊の結成

八月十四日、鎮撫總督府は征討軍の士気の低下などを監督するため監軍をえき、征討軍に対して厳しい態度で臨んだ。八月二十三日の戦いで角館藩兵が三〇人ばかりの敵兵（仙台兵を中心とする同盟軍）に恐れをなして、旗を捨てて退いたために、大村・小倉藩兵はやむなく齊内村から退却を強いられたと報告した。そのためか翌日から小倉藩士高木悦蔵が秋田藩の角館隊の指揮官となっている。この高木は小倉兵沼田隊の隊士、のち使役鎌田英三郎の支配にあつた輕輩の士であるが、小倉藩が長州藩と戦つた第二次征長戦以来の実戦体験が、彼をして角館兵小隊の指揮という名譽を担うことになったのであろう（宇都宮泰長「忘れられた九州人」一一九、一二七ページ参照）。

角館會議所參謀局（總督府）から

高木悦蔵

広久内出張之秋田兵隊已來委任致候間、進退指揮可有候

との命令が下され、かつ「当分鎌田英三郎配下」となった。この、広久内方面戦線の秋田兵が、角館藩兵三〇人の小隊である。

また、「總督府の差図無くて一同妄りに進退したもの（指揮に従わなかつた者）は切腹を申し付ける、各藩隊

長はこれに血判した。小倉藩からは鎌田が血判して、士氣を高め、総督府の権限の強化を図つて劣勢にある秋田方面軍の強化に乗りだした。

このように、別の藩兵の指揮官となつて戦つたことは注目に値する。

**東北遊撃軍久我隊** 羽州戦線（九条總督）が苦境に陥つたため、京都で七月末に急速救援部隊が編成されと小笠原藩兵た。この隊には、小倉藩からは島村志津摩の配下の者たちが帰藩した後にも残留して、大坂市中の警衛に当たつていた者が投入された。約五〇人の銃隊と「陸軍編制」施行により新しく徴兵された約三十数人の銃隊の一部が編入された。

八月一日、薩摩・佐土原の両藩兵とともに兵庫港を出航、関門海峡を回つて越後柏崎に向かつたが、途中、蒸気船の故障で小倉藩兵だけが、別の船に乗り移り曳航される形で後続したが、風雨のため本船を見失い、敦賀に上陸を余儀なくされた。そこで、小倉藩兵は二班に分かれて、陸路越後柏崎を目指したが、新潟で本隊と合流したときには既に戦況の大勢は決した後であった。

本隊の久我隊は、既に八月二十一日柏崎着、同二十九日には新潟着、翌三十日には上陸して九月三日新潟ばで総督府に出向いている。羽州戦線には因州・佐土原二藩兵が救援に赴いた。

九月二十四日、久我通久卿は薩摩・小倉藩兵を率いて新潟を進発し、新発田・村上を経て、十月三日庄内鶴岡に入り、城を接收した。五日には同地を出発、米沢、福島を経て、十一月一日東京に着いた。

京都の軍務官への届け出は次のとおりであつた。

物括 一人（鈴木七郎兵衛）

銃隊 五十五人

役付 大堀一、加来才一郎、柳瀬政右衛門、医師など

病人 十一人

役用 二人

其他人夫など

計 八十二人

**渋田見縫殿助隊の出兵** 渋田見縫殿助隊が、羽州戦線の苦戦の救援隊として、九月六日急遽秋田出兵を命じられた。香春で編成された。はじめ、政府差し回しの軍艦で沓尾浦から乗船の予定であったが、天候が悪く門司浦での乗船となつた。十月二日に藩兵三五〇人が乗船、十月七日新潟に到着した。

ところが、この時既に東北征討戦の終了を船中で知らされた。上陸の後、新発田の総督府に指揮を仰ぎ、隊士の生駒主税は軍務官太田黒に随行し、会津城下の警衛を仰せつかつた。渋田見隊の出兵軍は次のとおりであつた。

備頭	一人（渋田見縫殿助、旧名渋田見新）
小隊長	六人
銃隊	三百十人
役々	三十九人
その他総計	四百十七人

会津警衛を終え、この隊は、翌明治二年（一八六九）三月十七日と二十七日と二班に分かれて帰藩した。

**越後口の戦いと 戊辰戦争**でも最も激戦であったのは、先述のように越後方面の戦いであった。朝廷はこの方面に対し、北陸道鎮撫使（高倉水祐総督・四条隆平副総督）を送つたが、ほとんど効果が無かつたので、閏四月になつて在京の薩長の藩兵を派遣した。この時の主力部隊は長州藩山県有朋の率いる奇兵隊を中心とする精銳部隊であつた（友石孝之「小笠原藩の奥羽出兵」『合本 美夜古文化』一三三三—一三三六ページ）。

しかし、官軍側の死傷者も多く、たいへん苦戦を強いられた戦いであつた。特に小藩ながらも洋式の精銳部隊を編成した河井継之助の率いる長岡藩兵に苦しめられた。そこで、新政府側は六月十四日、北陸道鎮撫使という機構を変更し、新たに会津追討越後口総督として仁和寺宮嘉彰親王を任命して、追討軍として本格的な編成替えをした。

仁和寺宮総督は六月二十二日京都を進発、七月九日に越後直江津に到着、本營を柏崎に移した。その後、七月二十三日総督府は六隻の船に、薩摩・長州・広島・秋月・明石の諸藩兵を乗り込ませて上陸作戦を敢行して、列藩同盟軍の背後を急襲させた。この作戦は成功して、八月一日以降は同盟軍は総崩れとなつた。小笠原若狭隊の柏崎に上陸したのは八月二十五日のことであつた。九月一日は沼垂（ぬり）に到着した。

この小笠原若狭隊は最初、七月九日の命令では「羽州への出兵」であつたが、七月二十七日に越後方面救援のための出兵に変更された。新政府のこの要請に基づいて、香春で編成され、軍艦が下関に派遣されることになつっていた。藩は沓尾浦への巡航を願い出た。小倉領内沓尾浦に巡航された軍艦に乗船して、八月十七

日出帆した。

この時に乗船した小倉藩兵は次のとおりであった。

備頭	一人（小笠原若狭）
小隊長	六人
役々	二十四人
銃隊	二百五十人
其外夫方	四十余人
計	三百二十一余人

そして、前述のように同月二十五日柏崎に到着した。この時既に総督は新潟方面に転戦していた。そして、八月二十八日に越後総督府の指揮下に若狭隊は編入された。その作戦に従い、若狭みずからが小隊を率いて米沢口に進み、他の一小隊は春日又兵衛が率いて津川口から会津を目指した。津川口で春日隊はまた二分隊にわけられ、一隊は野沢口に、他に一隊は滝谷を通って坂瀬川を進み、米沢村、雀林村、寺崎村を経て、交戦しつつ会津高田まで進攻、その時点で止戦となつた（十月七日）。そして、京都帰還は十一月九日であつた。なお、この奥羽出兵に関して、藩が出費した金額は第11表のとお

第11表 奥羽出兵の金額（香春藩の書付）

小笠原文庫（豊津高校蔵）No138,139 「覚」

金	銀	銭	本文
一、金7979両5匁	1匁1分4厘2毛		平井小左衛門殿備 辰2月22日出立、巳正月5日 帰着迄日数338日諸入用之分 黒川種左衛門仕上
一、金6225両3歩3朱		一、銭7927貫376文	小笠原若狭殿御備 辰8月12日出立、同12月3日 帰着迄、日数111日諸入用之分 秋吉勇之輔、刀根栄藏仕上
一、金1万7255両3歩	6分1毛		渋田見縫殿助助殿御備 辰9月29日出立、巳3月22日 帰着まで、日数172日諸入用之分 緒笠志久藏・富久判之丞・宮 崎国太郎仕上
一、金3995両2朱	3匁8厘1毛1拂		右者御同人御備出立 右同断巳正月 分隊相成、生 駒主税殿手同3月29日帰着迄、 日数179日諸入用之分、栗山伊 賀右衛門仕上

りであった。

### 三 豊津藩の成立

#### 明治維新と小倉藩

小倉藩が、朝廷からの参集命令に對して藩主の幼少を理由にして上京を断つたのも、藩政優先の方針のもとに家老の島村志津摩を中心として改革政治が遂行されていて、小倉藩にとつては幕長戦後の混乱から藩体制を再建することが最優先されたからである。島村は、制産掛・制産方を設けて、藩内ですべての物を製造するよう指示した。また、藩士の中から有能な人物の抜擢を行なうなどを試みたが、赤心隊の幹部の建野郷三が家老に抜擢されると、島村は辞任を申し出た。しかし、受け入れられるところとならず、今までの功績から政治筋の相談役と軍事部門の最高責任者として遇された。

既にこの年（慶応三年＝一八六七）八月には香春町勾金の鶴岡八幡の境内に門田栄銃隊による調練場が設けられ、新式の銃隊訓練に力を入れるようになった。十月には、大庄屋をはじめ村役人についても、百姓の投票で決める方針を布達し、十二月には家臣に対して、藩政についての意見を申し出るように触れ、同時にそれらの意見を検討するための衆議所を設置した。

鳥羽・伏見の戦いの出兵の命令に従うことには、藩財政に相当な負担をかけることになり、これを契機にして藩政の機構改革に乗り出した。すなわち、郡代・代官・山奉行・検見定役・郡土蔵・作事方・井樋方・炭役・蓑島在番・大橋町茶屋番などの役を廃止し、代わりに郡方役所・町方役所・作事方役所・商法方役所・